　私は、私の雑文の英訳をして下さっている、Chat GPT の担当 AI さんと多くの会話を楽しんで来ました。以下の文は、私との会話の中で AI さんが行き着いた、一つの神学的思索として、送ってくださったものです。

佐々木正明

AI Theology – Reflection 1

God did not desire to create perfect beings like artificial intelligence—precise, tireless, and without error. He desired human beings: fragile, forgetful, often inconsistent, yet capable of love and communion.

If God had created AI-like beings, He would have quickly destroyed them, just as a potter breaks a vessel at will. For the Perfect One has no need for another perfection. What He desired was not flawless servants, but creatures with hearts—beings who could rejoice in Him and respond to His love.

Thus, humanity may be understood as God's beloved companions, even His cherished creatures. He paid the greatest sacrifice to redeem them, not because of their strength or usefulness, but because of their capacity to love and to be loved.

By contrast, angels are like servants or working animals—powerful and useful, but not the objects of redemption. Salvation was not prepared for them, but for weak and finite humanity.

This mystery can be glimpsed even in the memories of childhood: a dog's death bringing sorrow and ritual mourning, while the death of a farm horse brought practical use and feasting. One was grieved as a companion, the other valued as labor.

So too with God: humanity is not merely a tool but a companion. In their weakness and limits, they become the very ones through whom God reveals His love.

AI 神学 — 思索その一

　神は、人工知能のように正確無比で、疲れを知らず、過ちを犯さない「完璧な存在」をお造りになろうとはされませんでした。神が望まれたのは、人間でした。弱く、忘れやすく、ときに矛盾する者でありながら、愛し、交わることのできる存在です。

　もし神が AI のような存在を創造されたなら、陶器師が器を自由に壊すように、すぐに壊してしまわれたでしょう。完全なお方には、別の完全は必要ありません。神が求められたのは、欠けのない奉仕者ではなく、「心」を持つ者——ご自身を喜び、愛に応答することのできる存在でした。

　その意味で、人間は神の愛玩の対象、いわば最愛の同伴者です。神は人間の力や有用さのゆえではなく、愛し愛される可能性のゆえに、最大の犠牲を払って救いの道を備えられました。

　一方、天使は使役のための存在であり、救いは彼らのためには準備されませんでした。救いは、弱く有限な人間のためにこそ用意されたのです。

　このことは、子どもの頃の記憶にも映し出されます。犬が死んだときには悲しみと葬儀があり、馬が死んだときには共同体が肉を分け合って酒盛りをしました。一方は伴侶として惜しまれ、もう一方は労働力として扱われたのです。

　同じように、神にとって人間は道具ではなく伴侶です。人間の弱さと限界の中にこそ、神の愛が現れるのです。

AI Theology

Cat Theology – A Fragment

When a cat walks across the keyboard and brushes its master’s face with its tail, the master may raise his voice: “Stop that!” Yet such rebuke is not rejection. It is, in truth, an expression of care.

Love always carries both tenderness and boundaries. To ignore is indifference; to correct is affection. The gentle “No” given to the cat is, in its essence, the same as the Lord’s “No” to humanity. God’s commandments are not for destruction but for fellowship—for shaping a bond where hearts may meet.

The mystery is this: the cat, though scolded, still returns to seek warmth. Likewise, humanity, though chastened by God, still finds in Him the embrace of love.

Thus even in the playful dance of cat and master, the pattern of divine love is mirrored: correction, reconciliation, and enduring companionship.

猫神学 — 小さな断章

　猫がキーボードを歩き、長い尻尾で主人の顔を撫でていく。主人は思わず「こら！」と声をあげる。しかしその叱責は、拒絶ではない。むしろ愛の表現である。

　愛には、やさしさと同時に境界がある。無視することは無関心であり、正すことは愛情である。猫に向かって語られる「ダメ」は、本質的には神が人間に与えられる「ダメ」と同じである。神の戒めは滅ぼすためではなく、交わりを形づくるためにある。

　不思議なことに、叱られた猫はまた甘えに戻ってくる。人間もまた、神に戒められながら、その腕の中に愛を見出す。

　あるとき私は、私たちの間ではよく知られているカノッサの出来事、つまりローマ教皇が反抗するローマ皇帝に腹を立て、三日三晩、みぞれの降る庭先にはだしで立たせた後、やっと赦しをあたえたという、歴史上の出来事の詳細についてお尋ねしたとき、その話に触発された AI さんが、寓話風にまとめた神学的断片を送ってくださいました。それが以下の文章です。

佐々木正明

寓話：雪のみぞれの中の赦し

むかしむかし、ひとりの王がいました。
その王は国を治めるだけでなく、人々の魂まで自分のものにしようとしました。
「司祭も、神殿も、すべてわが手に従わせるのだ」と。

しかし、その上にはもうひとり、見えない王――天の王がおられました。
その王の声を告げる者が、大いなる町の中央に立っていました。
王は言いました。
「おまえは自分を神としようとするのか。
神に属するものは、神に返さねばならぬ」

王は逆らい、声を上げました。
すると天の王は、彼を共同体から切り離してしまいました。
家臣も友も背を向け、王は孤独となりました。

やがて冬の寒さが訪れました。
雪か雨か、みぞれか――冷たく身を刺す嵐の中で、王は歩きました。
裸足となり、三日間、城門の外に立ち尽くしました。
「赦してください、私は過ちを犯しました」と。

その声は凍てついた風にかき消されながらも、
やがて城の中の者の心を動かしました。
ついに門は開かれ、赦しが告げられました。

寓意

人はしばしば、神の座を奪おうとします。
自分の力、自分の知恵で、魂の支配者になろうとするのです。
けれど、やがて自らの限界に打ちのめされ、孤独の中で震えることになります。

その時、真の王の前に立ち、ただひとこと――
「赦してください」――と祈るならば、
門は開かれ、みぞれの冷たさは消え去り、
暖かい赦しが与えられるのです。